博３

氏　　名：	東　めぐみ
学 位 の 種 類：	博士（看護学）
学 位 記 番 号：	甲　第３号
学位授与年月日：	令和３年　３月　10 日
学位授与の要件：	学位規則第４条第１項該当
論　文　題　目：	［和文］ アクションリサーチを用いた看護実践を語る会による看護師の気づきと行動 ［英文］ Nurses' Awareness meetings to discuss nursing practices and develop nursing practice using action research.
論 文 審 査 員：	主査　姫野　稔子 副査　河口　てる子（主研究指導教員） 副査　本田　多美枝（第１副研究指導教員） 副査　山田　聡子 副査　石﨑　智子

論文審査の結果の要旨

本研究は、患者や家族の高齢化、疾病の重症化、治療の複雑化、入院期間の短縮化に加え、家族支援の強化や療養環境の整備等に看護の労力を要する急性期病院に焦点をあてている。当該病院において看護師自身がそれぞれの看護実践を意識し、その意味や価値観、次の看護実践に活用するための概念化が必要であるとの研究課題を出発点としている。また、看護実践から学びを得る「経験学修」に着目し、看護師自身が経験からの学び方や分析を通して専門的な知識やスキル、能力を伸展させるしくみづくりが医療現場へ貢献するという意義を持っている。

本研究の目的は、急性期病院で働く看護師が看護実践を語る会に参加することで、相互の実践の語りからどのように気づきを得て、どのように行動に移すのか、また、病棟看護師間や周囲の看護師にどのような変化をもたらすのかを明らかにすることとしている。看護実践の哲学的探究として「看護を語る会（以下、語る会)」というリフレクションの場の構築が重要であるとしている。研究デザインは、研究者のファシリテートの下、病棟看護師（以下、看護師）が看護実践において印象に残った場面を語り、得られた気づきを実践に移すという設計のアクションリサーチである。語る会は月１回計５回開催され、５名程度の看護師が参加した。各会において看護場面ワークシートを活用し、開催前に「想起：印象に残ったこと」「内省：なぜ印象に残ったのか」「フォーカス：場面を書くことで気が付いた自分が大切にしていること」を、開催後に「醸成：看護を語ることでの学び、実践に活かせると思っ

たこと」「発展：次回までに実践すること」を記載するよう求めている。各会の終盤には得た気づきや実践に関し、次の会までにどう行動するかを語らせ、行動の意識化を図るように展開している。

語る会に加え、開催期間前と開催期間終了後に、看護師や看護師長へインタビューを行い、看護師長には期間終了後 3 か月にもインタビューを実施するよう設計されている。これにより、語る会による変化を多面的かつ経時的に捉えることを可能としている。本研究は、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会（承認番号 30-312）及び共同看護学専攻研究倫理審査委員会（承認番号 18-03）の承認の下で実施された。

研究データは、語る会の録音データおよび前述した語る会前後に記載するワークシート、看護師および看護師長へのインタビューと多様である。語る会に参加した看護師は延べ 17 名、看護師長は 5 名であり、研究のデータは、量質ともに非常に豊富である。分析方法は、Lofland を参考にして進められ、その妥当性はアクションリサーチに精通している教育・研究者や 3 名の専門看護師との検討によって担保されている。

語る会参加以前、病棟看護師は、経験年数の違う看護師とは語らない、記録が多く看護実践の実感がない、退院調整の体制に課題があると感じており、看護師長は、語る風土の必要性や専門的役割を果たすことを課題と感じている実態があった。

語る会では、様々な看護実践の語りとやり取りが示され、各回に以下、5 つのテーマが導き出されている。1 回目は患者の信号をキャッチすることや理由を探り方法を変える等、【ほかの看護師の語りから気づきを得ていた】。2 回目は、語る会での内容をチームや多職種とで情報を一本化したりフィードバックすると、看護の質向上につながるという議論により【実践では見えなかった課題がみえた】。3 回目は、医師への働きかけにより意思決定支援につながった事例やチームに発信することが大事である等、【共有した課題を意識して実践していた】。4 回目は、多職種の専門性の活用や協働することが大事だという結論から【評価に対して現実との違いをフィードバックしていた】。5 回目は、患者に関心を持ち関わり続けることでセルフケア支援につながることに気づくとともに、「他者の経験をゆっくり聞くことで自分の気がつかなかったポイントを学ぶことができた」という語りがあり、【新たな視点を得て実践につなげる意識が持てた】。

語る会終了後のインタビューにおいて、発信できるチーム作りの必要性や伝え合いによる新たな視点、意識して聞き発信を待つこと、患者の言葉の意味を考えることなどの気づきを得、それを意図的に行動に移していることが明らかとなっている。また、経験知が増加する感覚も得られ、退院調整支援の体制も変更されるなど、語る会開催前に課題ととらえていた事項について好転的な変化が生じていた。

看護師長は、語る姿や意見交換し合うようになった等の変化を語り、終了後 3 か月には、カンファレンス以外で患者について語っている、多職種とのカンファレンスで専門性を語

るようになった、退院調整について意見を交換し合う姿がみられる等の変化を捉えていた。

これらの結果に基づき、①看護実践を語る会における病棟看護師の気づきと行動化②看護実践の語りと気づき③フィードバックと気づきの行動化④看護実践を語る会が看護実践を変える可能性⑤アクションとしての「看護実践を語る会」と転用可能性⑥アクションリサーチの仮定から生じた研究フィールドの負担の視点で考察されている。

看護実践を語る会において病棟看護師は、他者の看護実践の語りを聴くことで、新たな視点や発想を獲得していた。また、看護実践を語る会による気づきは意識化され、次の実践において新たな行動につながり、それは次の看護実践を語る会で語られ、病棟看護師にさらなる気づきをもたらすなど気づきの連鎖が起きていた。これにより、看護実践を意図的に改善することができ、より良質な看護実践につながることが示唆されている。また、先輩看護師による後輩看護師への肯定的フィードバックが行われることで、後輩看護師の自信につながり、看護実践の語りが促進されていた。さらに、語る会終了後は、病棟看護師やスタッフ看護師によって意図的に看護実践を語る場がつくられていた。病棟における看護実践を語る場は良質の看護実践につながることから、新たな看護師教育の可能性が示唆されたと結論づけている。

本研究は、看護師同士が看護実践を語る機会が少ない中で、看護師が患者に生じている現象をどのように捉え、判断し、ケアを行ったのかを語る場を設定し、看護師相互の語りから気づきを得、行動に移したのかを明らかにすること、また、参加者間や周囲のスタッフ看護師に看護実践への変化をもたらすのかを明らかにすることを目的として実施された。

アクションリサーチの手法を採用し、研究者がファシリテートしながら参加者が看護実践を語り、討論による気づきを得ることで、「共同化」と「内面化」が繰り返されていた。また、それぞれの語りを通してコミュニティが再構成され、課題を言語化することで解決を図っていく協調学習の場となっていた。これは、新たな職場学習の在り方を提示するものである。さらに、本研究の成果は、参加者が語る場を自立して創生し、気づきを意図的に看護実践に活用するという変化をもたらすことを証明している。この取り組みを看護師教育の一環として取り入れることで今後の看護実践能力や看護の質の向上に寄与することが期待できる。

本研究において、参加者同士が互いを引き立て、チーム力が向上していたことにも重要な意味があり、新たなメンタリング（メンタルモデル）としてチーム力向上にも貢献できる価値ある論文であると評価した。

以上により、本論文は、適切かつ妥当な研究方法により、新たな知見が得られており、その内容は看護学の研究として独自性があり、看護実践の質向上への貢献ならびに社会的意義が認められたことから、博士（看護学）の学位論文として非常に価値あるものとして認め、全員一致で「合格」と判定した。